

井伏鱒二著作調査ノート（その五）

——『井伏鱒二全集』別巻Ⅱ掲載「著作目録」以後——

前田 貞昭

「井伏鱒二著作調査ノート（その一）——『井伏鱒二全集』別巻Ⅱ掲載「著作目録」以後——」（本誌第14号、2003年2月10日）、「井伏鱒二著作調査ノート（その二）——『井伏鱒二全集』別巻Ⅱ掲載「著作目録」以後——」（本誌第16号、2005年1月20日）、「井伏鱒二著作調査ノート（その三）——『井伏鱒二全集』別巻Ⅱ掲載「著作目録」以後——」（本誌第18号、2007年1月25日）、「井伏鱒二著作調査ノート（その四）——『井伏鱒二全集』別巻Ⅱ掲載「著作目録」以後——」（本誌第21号、2010年1月25日）に続いて、新たに書誌事項を確認したものを含め、記載すべき井伏著作（複写）その他を入手することができたので、ここに報告する。

調査にあたっては、ヨミダス歴史館、聞蔵Ⅱ、占領期雑誌記事情報データベースを利用し、また、東郷克美氏から貴重な情報を頂いた。掲載資料については、ふくやま文学館、国立国会図書館、日本近代文学館、大阪府立中之島図書館の所蔵資料及びオンラインデータベースを利用させていただいた。兵庫教育大学附属図書館学術情報課を介して、福井大学附属図書館の資料も利用させていただいた。記して感謝申し上げる。

なお、東郷克美編・解題「大正十三年前後の井伏鱒二資料」（『日本近代文学館年誌——資料探索』6、日本近代文学館、2010年10月1日）には、田熊文助編『田熊龍子追悼帳』（1923年3月印刷）に掲載された井伏満寿二名義「詩——三〔病臥発熱〕病臥感傷〕素吟断章〕」、枯淡庵主人名義〔無題田熊龍子追悼文〕、及び、『人類』に掲載された「夜更と梅の花」（『人類』第3巻第1号、1924年5月）、「祖父」（『人類』第3巻第5号、1924年9月。本文標題は「父祖」と誤植）について、詳細な解題と本文が掲載されているので、そちらに譲る。田熊文助宛て井伏書簡の紹介が「大正十三年前後の井伏鱒二資料」のもう一つの眼目だが、上述のほか、『人類』第3巻第6号（1924年10月）掲載「借衣」と『世紀』第1巻第2号（1923年1月）掲載「借衣」との本文異同にも言及がある。

調査が至らず、書き加えるべきものが、多々あるかと思われる。お気づきの点を含めて、〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1 兵庫教育大学 言語系（国語） 前田貞昭（研究室直通電話兼用ファックス：0795-44-2083、e-mail:sadm@hyogo-u.ac.jp）まで御教示賜われれば誠に幸いである。

凡例

- 1、作品・アンケート回答・談話・訪問記事などに分類せず、年代順に並べた。ただし、形式は訪問記事や談話筆記に似ているが、内容からは近況を報じたゴシップ記事とおぼしいものは、参考として末尾に置いた。
- 2、個別の標題を持たないものは欄名などを〔 〕で括って仮の標題とするなど、〔 〕内には前田が附した文言などを入れた。
- 3、掲載媒体名・発行日・印刷日・発行所・発行人等についての記載は原則として現物奥附に従った。現物奥附には「印刷」「印刷納本」あるいは「編輯兼発行者」「編輯発行人」、「印刷」「印刷者」「印刷人」等の表示が混在しているが、本ノートでは統一しなかった。
- 4、人名・社名・地名などの固有名詞と引用文のうち、当該資料で旧漢字が使われていて、JIS第1水準・第2水準で対応できる場合は、原則として、原文の字形を尊重するように努めた。

村芝居

『日本戯曲全集月報』第24号（1930年12月〔推定〕）の第1面～第2面〔ノンブルはない〕に掲載。同月報は、春陽堂（東京市日本橋區通三丁目八番地）発行『日本戯曲全集』第22巻〈幕末江戸狂言〉（1930年12月15日印刷、1930年12月28日発行、編纂者・渥美清太郎、発行者・和田利彦、印刷者・木

呂子斗鬼次、印刷・明治印刷株式會社（神田區松下町七番地）、整版所・新倉東文堂、第24回配本、非売品）に挟み込み。月報そのものには、発行元・ノンブル・編集人・発行人・印刷人・定価などの記載はない。

本体には非売品の表示があるが、『日本戯曲全集内容見本』（1928年2月12日印刷、1928年2月15日発行）の表1（表紙）や表4（裏表紙）に「一冊壹圓」あるいは「特製一冊壹圓」とする。実質的な価格は1冊1円で、予約会員頒布の体裁を採った、いわゆる円本である。奥附には「日本戯曲全集・第二十二卷／幕末江戸狂言・第廿四回配本」と記すが、目次では卷名を「幕末江戸狂言篇」とし、背・扉では卷名を「幕末狂言集」とする。函には、平の上部に右横書きで「日本戯曲全集／第二十二卷／歌舞伎篇 第二十二輯」とあり、その下に縦書きで「幕末江戸狂言篇」と卷名を掲げ、続けて収録作品を列記する。函の背文字は「日本戯曲全集／22／歌舞伎篇／第二十二輯／春陽堂」とある。ここでは奥附の記載に従って〈幕末江戸狂言〉とした。

『日本戯曲全集内容見本』は、第1部・歌舞伎篇（全32卷）、第2部・現代篇（全18卷）で構成し、毎月2冊ずつの刊行を謳う。具体的には、歌舞伎篇と現代篇とを毎月1冊ずつ刊行し、現代篇刊行後は歌舞伎篇を毎月2冊刊行の予定という。目録などで「歌舞伎篇」「現代篇」などと附すのは、このように「現代篇」と「歌舞伎篇」とに分かっているためである。なお、本体末尾の渥美清太郎「解説」に、「來年から追加十八卷を出版する事になった。これで歌舞伎篇が五十冊に達し」云々とあり、また、月報第24号掲載の渥美清太郎「幕末の作物を集めて」末尾にも同様の趣旨が記されている。『春陽堂書店発行図書総目録（1879年～1988年）』（春陽堂書店、1991年6月30日）は、歌舞伎篇50卷・現代篇18卷の全68卷が刊行されたことを記録する。

井伏文を掲載した月報第24号は、1枚もので、表・裏に印刷。縦23.5cm、横18.5cm。表（第1面）右上の題字欄には右横書きで「日本戯曲全集月報」とあり、その直下に「No.24.」と記載する。

ルビなし。17字×125行。「私は六歳の幼いとき、はじめて芝居を見た。私の郷里には山の裾に段々畑が幾つもあつて、芝居小屋は、収穫後のこの段々畑に假設されたのである。」と始まる。上演された「初花・勝五郎」をめぐるのは、小作人の栗根義太五郎が扮した初花の可憐な姿や、芝居と一体化して興奮する村人の様子が印象的であったとするが、芝居の後半部分は、母に抱かれて眠ってしまっで見られなかったと記している。

この芝居見物については、井伏「見世物」（『改造』第20巻第4号、1938年4月1日）、「あの頃の演劇青年」（『演劇』第1巻第2号、1951年7月1日）にも言及がある。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

〔文藝思想 Who's who〕

讀賣新聞社（東京市京橋區銀座西三丁目一番地）発行『讀賣新聞』（朝刊）第19715号（1932年1月9日）第4面に掲載。編輯兼発行人・三芳亥吉、印刷人・篠原久吉。

アンケート回答。個別標題はない。「文藝思想 Who's who [7]」と欄名・回数表示があり、その下に「——質問要項——／（五十音順）／1、本姓、ペンネーム、出生地生年月／2、貴下の言葉（モットオ）／3、思想、藝術系統／4、略歴／5、代表作／6、住所」とある。井伏回答では、2の質問に対して「どうにかしなければやりきれない。」と答え、3には「過渡期的の絶望に由来する文學」と回答し、5には「なし。」と書いているところが注目されようか。なお、この第7回の回答者は、井伏のほか、生田長江・石濱知行の二人である。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

〔一戸務宛書簡〕

今日の文學社（東京市本郷區駒込千駄木町五九番地）発行『今日の文學』第3巻第11号（11月号、1933年10月15日印刷納本、1933年11月1日発行）掲載、一戸務「人さまさま」（26頁～33頁、48頁）の28頁に引用。編輯発行兼印刷人・加宮貴一（東京市本郷區駒込千駄木町五九番地）、印刷所・日興舎印刷所（東京市本郷區金助町廿九番地）。

一戸務「人さまざま」は、転居の際に見つけた一戸宛私信の中から、「主として、筆をとる新進の作家のもののみ摘みだした」として、深田久彌・今日出海・松岡譲・長谷川時雨・榊山潤らの書簡を紹介する。末尾に「十月九日夜 井萩町 井伏鱒二」とある井伏書簡には、「「仕事部屋」は氣のりのしない書物でしたので、べつに今度あらためて力作を書かうと思つてみます。」などという文言が読まれ、また、戸塚のグラウンドで中島直人と一緒に野球を見物した時、中島が珍しく快弁であったことにも言及がある。

ハサミ将棋の圖

讀賣新聞社（東京市京橋區銀座西三ノ一）発行『讀賣新聞』〈朝刊〉第20887号（1935年4月5日）第4面に「早春戯譜（20）」として掲載。編輯発行兼印刷人・三芳亥吉。

14字×14行。ルビなし。「繪を描けといふ話なので臆面もなく描いてみた。拙宅の圭介と友人津島君がハサミ将棋をしてゐるところを寫生したのである。」と始まる。井伏文の上部に、2段半を使って「津島君と圭介ハサミ将棋をする圖 鱒二寫」と書き込みのある絵が写真版で掲載されている。井伏文の後、波野を挟んで、ゴシック体で印刷された「「現代一流藝術家餘技展」（十一日から廿日まで銀座三越階上で主催文藝部）」という文言がある。井伏「太宰治のこと」（『文芸春秋』第26巻第8号、1948年8月1日）にある、「そのころ読売新聞社主催で素人余技の美術展覧会があつたので、私は太宰君と拙宅の幼児を寫生して「津島君と豚児圭介・ハサミ将棋をするの図」と題する小品その他を出した。」（新版全集第12巻、299頁）という記述と併せると、写真版で掲載されている井伏の絵が「現代一流藝術家餘技展」に出展されたものと推定される。なお、この絵は、『書窓』第1巻第4号（1935年7月10日）267頁に「書物人餘技集（4）」として掲載されている。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

多甚古村のこと

東寶發行所（東京市麹町區有樂町一の十二／東京寶塚劇場）発行（1939年12月1日印刷、1939年12月1日発行）『有樂座十二月興行脚本解説』の10頁に掲載。編輯兼発行兼印刷人・奈須藤三郎（東京市大森區上池上町九三七）、印刷所・大日本印刷株式会社榎町工場（東京市牛込區榎町七）、定価15銭。

全24頁（最終ノンブルは「23」）、共表紙の小冊子で大きさは縦12cm×横15cm。表紙の右上には縦書きで大きく「新國劇」とあり、左側には同じく縦書きで「十二月公演脚本解説／有樂座」とある。目次に相当するところには右横書きで「有樂座十二月興行脚本解説／新國劇出演」とある。奥附にはこの冊子の標題に当たるものはない。ここでは有樂座（東京寶塚劇場）が発行主体と判断して、目次に相当するところから掲載媒体名を採った。

目次に相当するところには、佐々木孝丸作並演出「沖家の兄弟」、井伏鱒二原作「多甚古村」、林不忘原作「魔像」の三作品を演目として掲げ、上演日などに関しては「十二月一日より十四日まで／毎夕五時開演」、また、「マチネー（日曜）は正午開演。「多甚古村」「魔像」のみを上演。」と記す。本冊子末尾に「有樂座座席表」（奥附の次、24頁に相当するがノンブルはない）等が掲載されていることから、公演当日に劇場で販売されたものと推定される。有樂座は、株式会社東京寶塚劇場が経営する劇場で、「国民劇創造を指向する劇場として」（東宝五十年史編纂委員会『東宝五十年史』東宝株式会社、1982年11月10日、349頁）1935年6月7日に開場した、定員1631人の劇場（同書、158頁）。1951年1月から映画専門劇場になるまでの15年間、娯楽演劇の場として、東宝劇団以外には、新國劇・東宝古川緑波一座・芸術座水谷八重子一座などが公演した（同書、352頁）という。

総ルビ。60字×10行目（ただし、1行目のみカットとの関係で38字）。全3段落で構成。冒頭段落には「多甚古村といふ名前は假名である。甲田巡查の名も假名である。しかし作中の事件や登場人物は、たいてい實際発生したことや實在するものをモデルにした。現代の實相の一部を寫しとつて置かうと思つたのである。」とある。第2段落冒頭で「はじめ私は、隨筆風の讀物のつもりで、その發端を書いた。」と言ひ、『文體』『改造』『文學界』などに分散発表した経緯を記した後、再び「その都度、隨筆風の讀物のつもりで書いたのである。」と強調し、したがって「全篇を通じる筋書のやうなもの

はない」ので「シナリオ化することは無理な話だと思つてゐる。」とする。第3段落では、「多甚古村」の「タジンコ」が「イタドリ」の方言であつて、このような名前の村は実在しないだろうから、標題に用いた旨を記している。なお、この時上演された「多甚古村」は高田保が脚色・演出。

次に掲出する『新國劇』第23号（1939年12月5日）にも同題で掲載されている。それ以降の再録はなく、新版全集にも未収録。

多甚古村のこと

新國劇事務所（東京市豊島區駒込三丁目四三五番地）発行『月刊新國劇』第23号（1939年12月1日印刷納本、1939年12月5日発行）の第3面に「原作者の言葉」として掲載。編輯人・金子市郎、発行兼印刷人・小田切泰通、印刷所・東水印刷所、定価3銭。

第1面の題字欄には、縦書きされた誌名「新國劇」の上に小さく右横書きで「月刊」とある。欄外上部には右横書きで「新國劇」とある。後述する季刊の『新國劇』と区別するため、本ノートでは『月刊新國劇』の題号を用いた。縦31.2cm、横23.2cmのリーフレットで、全4面。第1面上部欄外に右横書きで「(毎月一回五日発行)」とあり、第4面下部欄外に縦書きで「定價一部金三銭」とある。

井伏文の標題左脇に小さく、「・原作者の言葉・」とある。

前掲「多甚古村のこと」の再録。パラルビ。15字×35行。新國劇の年末興行で「多甚古村」を上演するに当たって掲載。第1面掲載の「聖戦第三年の掉尾を飾る／新國劇短期豪華公演／新作二篇と當り狂言を揃へて」中には、「**多甚古村**、二幕六場は現文壇に独自の風格を以て確固たる地位を築く異色作家井伏鱒二氏の傑作」と紹介されている。井伏文が掲載された第3面には、脚色・演出を担当した高田保の「多甚古村の脚色演出に當り／悲劇かも知れない喜劇」や、「多甚古村」の作中人物や配役を紹介する「多甚古村／主なる人物紹介」（傍点、ママ）などの関係記事もある。

なお、第4面掲載の「十二月のメモ」には、有樂座公演が12月1日～14日、名古屋御園座公演が12月16日～25日とある。

前掲『有樂座十二月興行脚本解説』では第3段落の「タジンコとは、」とあるのに対して本リーフレットでは「タジンコは、」とある。また、本リーフレットでは行末句点が二箇所省かれている。

題号・号数・発行所も同じ『新國劇』第23号（新國劇事務所、1939年12月30日印刷、1940年1月5日発行）に「多甚古村の巡查」（新版全集第8巻に収録）が掲載されているが、これは本リーフレット第2面の囲み記事「新國劇／——近日新春號發行——」で紹介する全67頁の冊子であつて、その奥附には年4回発行を謳っている。

みはらし茶屋（御坂峠）

朝日新聞東京本社（東京都千代田區有樂町二丁目三番地）発行『アサヒグラフ』第48巻第11号（通巻第1201号、9月10日号、1947年9月10日発行）の12頁～13頁に「御意のままページ④」として掲載。編集人・伴俊彦、印刷兼発行人・春海鎮男。発売所・朝日新聞社東京本社／大阪本社／西部本社。定価10円。

見開き中央上部に「企劃・構成・記事 作家 井伏鱒二氏」とある。キャプション付きの写真11葉と、12字×36行の記事とで構成。記事は旧漢字・新仮名遣い。ルビなし。記事は二つの段落で構成。その第一段落は「山梨縣（甲州）は地勢上クニナカとグンナイとに二分されている。」と始まり、「しかし他國ものの私には、甲州人はいかに頑迷であるか、排他的であるか、狡猾であるか、それともまた人情酷薄であるかないか、そういう本質的なところはよくわからない。」と結ばれる。第二段落では、「クニナカとグンナイは、笹子・三ッ峠・御坂峠というような高い山の連なりで距てられ、汽車以外の交通は山越えの道によるほかない。」その一つの御坂峠の茶店について説明する。各写真に附されたキャプションも井伏の手になると思われる。

「御意のままページ」は、第48巻第8号（1947年8月20日）掲載の洋画家・宮本三郎による「金澤新風土記」から始まり、毎週12頁～13頁の見開きを使って掲載されている。第2回は横山隆一「カーニバル廿四時間」、第3回は堀内敬三「江戸發掘」で、井伏に続く第5回は丸木砂土「ぐろてすくこ

みつく」である。いずれもキャプション付きの写真を多用し、担当者執筆の記事を附す。なお、この連載の趣旨についての説明は、第1回以降のどこにも見当たらない。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

郷土出身花形作家訪問記①——山茶花の匂う簡素な庭・井伏鱒二の巻——

中国新聞社（広島市上流川町2番地）発行『中国新聞』（1948年12月12日）第19640号の第4面に掲載。編集人印刷人発行人・糸川成辰。

訪問記事。記事中に、郷土出身の文学者・画家についての井伏の発言が鈎括弧付きで引用されている。中国地方出身の文学者として井伏が名前を挙げているのは、小山裕二・古川洋三・木山捷平の3名で、記者に問われて藤原審爾・阿川弘之についても触れる。また、画家では□山公一〔□は判読できないが、「片」とあるべきところ〕・北川実の名を挙げる。記事冒頭に井伏のポートレート1葉を掲げる。この第一回には、井伏訪問記に続いて「妥協しない兵隊靴の男・阿川弘之の巻」を掲載。

眞夏のむだごと

株式会社毎日新聞社（大阪中央局区内北区堂島上二丁目三六）発行『サンデー毎日別冊』（中秋傑作集）（1949年10月15日発行）の26頁～33頁に掲載。編集人兼発行人・尾崎昇、発売所・毎日新聞社、定価70円。

表紙（表1）には上部中央に左横書きで「サンデー毎日」、右下に縦書きで「中秋傑作集」とある。背には「サンデー毎日別冊 中秋傑作集」、裏表紙（表4）左肩には発行日・定価などの刊記とともに「サンデー毎日別冊 中秋傑作集」とある。

新漢字・旧仮名遣い。ルビなし。

挿画・中村琢二。

新版全集編輯時点では合冊製本されているものしか見ることが出来ず、裏表紙（表4）に記載されている発行日が確認できなかった。やむを得ず、本作を収録した新版全集第13巻「解題」及び別巻2の「著作目録」では、通常号に掲載された広告などを根拠として、通常号の第41号（1949年10月9日）と第42号（1949年10月16日）との間に発行されたと推定した。この度、現物を入手したので発行日を報告しておく。

永井君の短篇集〔永井龍男著『朝霧』推薦文〕

改造社（東京都中央区京橋一ノ三）発行、永井龍男著『朝霧』（1950年6月10日印刷、1950年6月15日発行）の帯に掲載。『朝霧』は、発行者・平田貫一郎、印刷者・北川武之輔、印刷所・細川活版所、製本所・小高製本所、定価280円。

井伏文は、ジャケットに附された帯の表紙面に掲載。「永井君の短編集」の標題の後に「井伏鱒二」とあって、続いて井伏文を掲載する。帯の背に当たる箇所には「第二回横光賞受賞」とあり、帯の裏表紙面は既刊・新刊広告に充てる。

旧漢字・旧仮名遣い。ルビなし。16字×15行。全3段落で構成。冒頭段落には「よほど以前、日本に来てみた中国の或る詩人が、こんなやうに云つた。」とあって、永井の、一作毎に素材・発想・構成に工夫して「類型を排除する精神」を称揚する。

井伏は第一回から横光利一賞選考委員で、このほか、『朝霧』授賞に関わる井伏の文章には「横光賞詮衡後記」（『改造文芸』第2巻第4号、1950年4月1日）がある。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

櫻桃忌

財団法人大藏財務協会官廳会計実務班通信講座編集部（東京都新宿区四谷本鹽町二大藏省主計局内）発行『明窓』第1巻第4号（7月号、1950年6月25日印刷、1950年7月1日発行）の66頁～68頁に掲載。編集兼発行者・平井平治、印刷所・信陽堂印刷所、定価50円、地方売価55円（運賃諸掛共）。

旧漢字・新漢字が混在する。旧仮名遣い。ルビなし。60字×49行。冒頭段落は、「櫻桃忌」といふのは、亡くなった太宰治を供養する会である。毎年六月十九日に、太宰の友人知己が三鷹の禪林寺に遺族を招いて故人の思ひ出を語りあふ会である。去年は案内状を四十通ばかり出したところ七十人あまりの人が集まった。誰でも來会自由といふ立前のため、噂をきいたといふことで、はるばる九州からやつて來た愛読者もゐた。信州、津軽の方からも上京参会した愛読者がゐた。」とある。「愛読者ばかりではなく、太宰に師事したいといふ文学志望の青年子女が夥しい数にのぼつてゐた」ことに、太宰の死後、「私」はようやく気がついた。こうした人たちから寄せられる手紙には「いつさい返事を出さない方針にきめてゐる」のだが、「ヴィヨンの妻」の主人公を太宰そのままだと受けとめている手紙に対しては、放置しておくで「却つて太宰を侮辱したままにしておくようなものだらう」と思つて、「日本敗戦の直前直後における姿が暗示されてゐて、作者が嘆きと怒りを込めて書いてゐるのが傳はつて來る。決して作者自身の生活を写したのではない。」という解説を書いて送った。一周忌が過ぎるとこうした類の手紙は跡を絶った。今年の櫻桃忌では「雀こ」を津軽訛りの人に朗読してもらふという企劃がある。打合わせではその朗読を今官一に頼むつもりだということだった。今は「心がけがスマートな人」で、「津軽訛りはあるにしても、出來得る限り標準語に近い發音で朗読するおそれがある」と危惧したところ、「年は若いが眞面目な学生」に読んでもらうようになったとのことであつた。「私も太宰の短篇を朗読してみたい。しかし私の發音には西國者の訛りがある。」最後の段落は「私たちは「櫻桃忌」を中絶させないやうにしたいと云つてゐる。たぶん私たちがゐなくなつてからも続くだらう。」と結ばれる。文末に「(二五、六、一〇)」の日附がある。

『福井新聞』第17373号(1950年6月15日)に掲載された同題作品があり、櫻桃忌で「雀こ」を朗読する挿話を中心に書かれている。素材は重なるが、別作品と見た。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

〔劍豪文学の流行〕

毎日新聞社(東京都千代田区有楽町1の11)発行『毎日新聞』(朝刊)第28486号(1950年9月3日発行)の第5面に掲載。

談話。井伏談話に個別の標題はない。「劍豪文学の流行」の内。リードには「劍豪文学が大流行である。「オール読物」「小説新潮」「小説公園」など中間文芸雑誌は毎月三、四編必ず載せ、なかには特集をやったりしているのもあり、さらに純文芸雑誌にまで進出する勢い。これに刺激されてか現在刊行中の「大衆文学全集」(河出書房)が最近の劍豪ものを収録する予定といわれる。以下は「劍豪ブーム」由来記である。(K・K)」とある。このリードにいうように、劍豪小説の最近の盛況と特徴に触れ、その状況に関わる談話を、鉤括弧付きで記事中に引用する。「劍豪文学の流行」の大見出しの下に、「現代的な心理描写／舞台が広く筋が面白い」、「決闘場面の魅力／五味康祐の描写の巧さ」、「史実は問題でない」、「風俗小説流行の反動」の見出しがある。記事中には、井伏のほか、大井広介・本多顕彰・十返肇の談話も引用されている。井伏は「このごろの出来事は都会でも地方でも皆同じ。事件が類型化しているので小説のテーマにしようと思つてもむずかしい。」それに対して「時代物では舞台は広く、自由活達にフィクションしても、少しも不自然に感じられない利点がある。」と述べ、そのうち、すばらしい作品が出来るかしも知れないと語っている。

なお、この井伏談話は、吉田健一「愚者の樂園」(『讀賣新聞』(朝刊)第28297号、第8面、1955年9月5日)冒頭に引用されている。

輕石

朝日新聞社厚生事業團(東京・東京都千代田区有楽町2ノ3／大阪・大阪市北区中之島3ノ3／西部・小倉市砂津字富野口北380)発行『週刊家庭朝日』第82号(1950年9月16日発行)の第4面に掲載。編集印刷発行人・山本地栄、定価一部10円(月極め25円)。

第1面の題字欄には、左横書きで「朝日家庭朝日」とある。その下に「THE ASAHI HOME & WELFARE WEEKLY」と英文題号が記載されている。なお、題号欄左に「一部 10円【月極め25円】／【毎土曜日

発行・月二回特集増頁】ともある。なお、要目を示した第一面「◇本号の読み物◇」には、「隨筆「輕石」井伏鱒二」とある。

「來」と「来」が混用され、また、「瀬戸内海」などとする箇所もあるが、概ね、新漢字を使用し、旧仮名遣いに従う。ただし、促音は小書き。本文に附された標題は「輕石」だが、本文中では「輕石」と新漢字が使用されている。なお、本文末尾の「(九月七日)」の日附に続いて「＝かなづかい原文通り」という断り書きがある。促音が小書きされているのは、井伏自筆原稿では促音が多く小書きされていて、この「輕石」も同様だったことによると推測される。ルビなし。23字×60行。「先日、田舎へ行ったついでに、鞆ノ津といふ港から快足船で釣りに出た。その数日前、新聞の地方版に次のやうな記事が載ってゐた。／＼二十何人の漁師が何そうかの船に分乗出漁してゐると、意外にも網に機雷が懸かってあがって来た。」と始まる。「私」が乗った快速船は木造で触雷の心配はなかったにしても、船頭に注意するように言うと、船頭は新聞記事の漁師たちは機雷を引き上げることが目的だったのだと大笑いした。「海賊が出るのか」ときくと「出る。」と船頭が云った。」何だか不気味だったが、船頭は沖に見える走島まで船を進め、そこで「私」は白キスとフグの小さいのを釣った。「その日、私は鞆ノ津の近くの福山市の駅前旅館に投宿し」て、「入江の埋立地にある小さな酒場にはひった。」「坊主あたまの先客」は、近頃海賊が増えた理由について、「終戦後に櫻島が爆発したため」で、「もうせん櫻島が爆発して、輕石がたくさん瀬戸内海に漂流して来た結果、意志の薄弱な青年が、その輕石を見てゐるうちに海賊を働らく量見を起した」という説を披露した。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

演舞場の『本日休診』

讀賣新聞社（東京都中央区銀座西3ノ1）発行『讀賣新聞』〈朝刊〉第26580号（1950年12月17日）第4面に掲載。編集印刷兼発行人・田辺則雄。

新漢字・新仮名遣い（ただし、促音は並字）。ルビなし。14字×42行（ただし、二段で組まれた井伏文中央に、各段の11字×5行分と段間を使って標題・筆者名がある。その分だけ実際の字数は少ない。「私は演舞場の「本日休診」を見て、自分があの作品（原作）を書く場合に「会話」の扱いかたに少し注意が足りなかつたことに気がついた。」と始まる。小説と演劇とのジャンルの相違に言及しながらも、「ただ小説（あの原作）では、地の文章で強引に人物の動きを説明しようとしているだけである」点が気になったとする。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

「伊東 ドン・マンショ」

讀賣新聞社（東京都中央区銀座西3ノ1）発行『讀賣新聞』〈朝刊〉第26788号（1951年7月9日発行）の第4面に掲載。編集印刷兼発行人・田辺則雄。

アンケート回答。「書きたい歴史小説／諸家回答」の内。戦国時代、伊東マンショについて長篇を書きたいと回答。井伏のほか、丹羽文雄・石坂洋次郎・林房雄・坂口安吾・大仏次郎らが回答。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

自信はなかつた

読売新聞社（東京都中央区銀座西3ノ1）発行『讀賣新聞』〈朝刊〉第28452号（1956年2月8日発行）の第7面に掲載。

談話。「芸術院賞本ぎまり／水谷八重子ら10氏」の内。「自信はなかつた／井伏鱒二氏」という見出しで、「【甲府発】井伏鱒二氏は七日定宿の甲府市桜町梅ヶ枝旅館で受賞の喜びを次のように語った。」というリードの後に、井伏の発言を引く。井伏の発言は、「漂流民宇三郎」が「前田家の尊啓閣文庫にある漂流記の写本から書き出した実話小説」で、「ジョン万次郎漂流記」以来「マンネリズム気味だったところだからテレている」というものである。「旅先の旅館で喜びを語る井伏鱒二氏＝甲府電送」というキャプション付きの写真を1葉掲載。記事全体のリードでは、7日午後、会員による書面投票開

票の結果、日本芸術院の恩賜賞・芸術院賞が過半数の得票を得て本決まりになり、5月頃に授賞式が行なわれる予定とする。

なごやかに贈呈式／井伏氏への野間文芸賞

読売新聞社（東京都中央区銀座西3ノ1）発行『読売新聞』（夕刊）第32408号（1966年12月19日発行）第7面の「手帳」欄に掲載。

記事中に談話を引用。17日午後、第19回野間文芸賞贈呈式が東京丸の内の東京会館で行なわれたことを報じるなかで、丹羽文雄・河上徹太郎の祝辞に続いて、受賞作「黒い雨」について「これが小説かどうかは少々気にかかる。むしろ井伏鱒二編著とした方がいいかもしれない」との文言を含む、井伏の挨拶を鉤括弧を附して引用する。「野間氏から賞を受ける井伏氏」というキャプション付き写真1葉を掲載。

郷里岡山に故木山捷平氏の詩碑

読売新聞社（東京都中央区銀座3ノ2ノ1）発行『読売新聞』（朝刊）第33836号（1970年11月20日発行）第17面の「レシーバー」欄に掲載。

木山捷平詩碑除幕式を報じる記事中に、除幕式案内状の井伏文を紹介するとともに、除幕式における井伏の挨拶から、「流行作家ではなかったが、晩年になるにつれ、よい作品をつぎつぎ発表、多くの人に愛された」という部分などを鉤括弧を付けて紹介する。「詩碑の前で思い出を語る井伏鱒二氏」というキャプション付き写真1葉を附す。

八ヶ岳仰ぎ、縄文時代のしび／小栗上野介取材では群馬まで——井伏鱒二さん（作家）——

読売新聞社（東京都千代田区大手町1-7-1）発行『読売新聞』（夕刊）第36653号（1978年8月17日発行）第7面の「近況」欄に掲載。

訪問記事。長野県・信濃境の井伏の山荘を訪問した記事で、井伏の写真一葉を附す。駅近くや山荘の様子を記載した後に、縄文時代の遺跡や小栗上野介の取材のこと、また、「徴用中のこと」や戦争終結に関わる、井伏の談話が鉤括弧を附して引用されている。記事末尾に「(省)」の署名がある。

細石さんの焼物

泥牛・杉本立夫／細石・加藤静允『遊泥二人集』其ノ一（1979年春吉日）の4頁に掲載。発行人・杉本立夫、編集人・加藤静允、印刷製本・大日本印刷株式会社、限定600部、非売品。

新漢字・新仮名遣い。ルビなし。34字×8行。全2段落で構成「先年、加藤細石さんが一水会の陶芸部に出品した。古伊万里を写した作品数点であった。」と始まり、「細石さんは使い良い焼物を作りたいと心がけているようだ。」と結ばれる。本文の後に「昭和五十四年六月／井伏鱒二敬白」とある。本書は泥牛・杉本立夫と、細石・加藤静允の二人の陶芸作品写真集。細石は加藤静允の号で、中学生時代の加藤（加藤は1936年生まれ）が書信を以て釣り人としての号を井伏に所望したところ、それに応えて井伏が細石の号を与えたという。以来、井伏との交流が始まる。京都市に住んだ加藤は、その後、医学部に進学して、やがて父を継いで小児科の開業医となる。加藤は小児科の領域でも様々な活躍するが、釣りのほかに、陶芸や絵画の趣味を持つ。加藤と井伏との交わりについては、加藤静允編集・発行『井伏鱒二書簡集 翻刻版——細石・加藤静允宛——』（2011年4月1日、私家版）に詳しい。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

獵犬のこと

新潮社発行『河上徹太郎著作集第四卷月報』（1982年2月）の1頁～3頁に掲載。同月報は、新潮社（東京都新宿区矢来町七一）発行『河上徹太郎著作集』第4巻（1982年2月15日印刷、1982年2月20日発行、発行者・佐藤亮一、印刷所・東洋印刷株式会社、製本所・神田加藤製本株式会社、定価2700

円)に挟み込み。月報そのものには、編集人・発行人・印刷人・定価などの記載はない。

『河上徹太郎著作集』第4巻は、帯によれば第6回配本で、帯文には「代表的芸術論27編、キリスト教への深い理解を示す名著「新聖書講義」、唯一の創作「高原日記」を収録。」と謳う。帯の背に当たる部分と、函の平および背には、収録作として「ドン・ジョヴァンニ／新聖書講義」の2篇を掲げる。

新漢字(一部固有名詞は旧漢字を使用)・旧仮名遣い。パラルビ。24字×97行(次に引用する冒頭2字下げの3行分を除く)。冒頭に「——河上君の晩年は獵を楽しみにしてみたやうだ。学生時代にも、お父さんに連れられて鉄砲打ちに出かけてみたさうだ。」という、2字下げでポイントを落とした部分を置き、続く第一段落は、「河上徹太郎が「文學界」の同人として編輯を手伝ふやうになつたのは、二・二六事件のあつた年ではなかつたかと思ふ。あの事件が起つてから、何か知らないが何か急激に変わつて行くやうになつた。若い作家たちのうちには(私も含めて)方向がわからなくなるのがあつたりして、保田與重郎等の「日本浪漫派」が出る一方には、武田麟太郎等の「人民文庫」が発刊されたりした。当時、私は気持の上では右往左往ばかりしてみたやうだ。」と始まる。具体的に描かれるのは、「その年の夏、八月の末頃から九月の末にかけて、私が甲州御坂峠の茶店に泊つてゐる」時にやって来た河上が、茶店に飼われていた子犬に目を付け、執拗に売ってくれと交渉したが、結局、手に入れられなかったという挿話である。初めのうち、その犬は「^{ずいどう}隧道の馬鹿犬」と呼ばれていたのであるが、茶店の主人がハチと名付けて訓練を重ねると、立派な獵犬になったという。子犬の頃のハチを「見どころがある」と評した河上の言は「言葉の綾だけではなかつた」のである。二代目ハチのこと、また、猪の捕り方についても触れる。

その後の再録はなく、新版全集にも未収録。

赤櫨と白櫨

加藤静允著『遊泥漫録』(1992年秋発行)の150頁～151頁に掲載。私家本。世話人・児玉正人、印刷所・こだま印刷所、限定200部、非売品。

新漢字・旧仮名遣い(ただし、促音は小書き)。ルビなし。「先日は皿を御恵送にあづかり有難うございました。」と始まる。その皿に使われていた模様を幼い頃に「ゲンロク模様」と覚えていたが、後年(「戦前に田辺製菓がネストンの宣伝のとき」京都へ行く機会があつて)、同じ模様を「京都の立派な家の襖」に見た。そこで拾った「櫨の木の実(どんぐりの実)」を持ち帰って自宅の庭に植えたところ、ずいぶん大きな赤櫨になり、古くから植わっている白櫨と競争になっている、と記す。冒頭の「拝啓」の1行と、末尾の署名・宛名を除いて、39字×18行。本来は1987年2月附の加藤宛井伏書簡で、それを「赤櫨と白櫨」の標題を附して掲載。「あとがき」には、その事情が「井伏鱒二先生からのお手紙、先生と奥様のお許しを得て使わせていただきました。」と説明されている。

「あとがき」末尾に「一九九二年六月二十一日 夏至／かとうきよのぶ識す」とある。奥附には、書名が「私家本／遊泥漫録」とあり、また、発行日附に該当する記載は「一九九二年(平成四年)秋」とだけあり、著者は「^{かとうきよのぶ}加藤静允」とルビ付きで記載されている。

その後、加藤静允編集・発行『井伏鱒二書簡集 翻刻版——細石・加藤静允宛——』(2011年4月1日、私家版)に、第131番として掲載されている。

新版全集には未収録。

**** 参考 ****

〔紙弾〕

讀賣新聞社(東京都京橋區築地三丁目一番地)発行『讀賣報知』第24604号(1945年7月4日)第2面に掲載。編輯兼印刷発行人・田邊則雄。

山梨県甲運村に疎開した井伏が、勤労奉仕にも出掛けて村人に馴染んでいるという近況を報じた記

事。東京から来た友人が銭湯で靴を盗まれて、甲州が住みやすいと吹聴していた井伏の面目が潰れてしまった挿話も紹介する。「紙弾」は1943年1月1日から開設された連載コラム名（『読売新聞100年史』別冊〈資料・年表〉、読売新聞社、1976年11月2日、54頁）で、固有の標題はない。記事中に鉤括弧付きで井伏の発言も記されているが、井伏家の甲運村疎開を「数年前」とするなど、信頼性に欠けているところがある。ゴシップ記事の一種と解するべきかと思われる。